



## 長井市に残る近代洋風建築と歴史的背景

長井市には、二十一世紀の現在も市内に多くの近代建築が残存します。近代建築の定義は、明治時代以降に日本で欧米の影響を受けて建てられた建築物の総称と言われています。建築物は富の集積がなければ築くことができません。まして欧米の影響を受けた建築物を構築しようとするれば、富にとどまらず情報も重要なファクターとなります。その2つが長井市にあったと言えるでしょう。それらは1694（元禄7）年に京都の豪商、西村久左衛門によって黒滝（現在の最上川、白鷹町）の開削が行われ、米沢藩の舟着場が長井にできたことに起因します。1702（元禄15）年には、現在の「やませ蔵美術館」を運営する山清が創業しました。最上川沿いの湿地帯であった「舟場」が一躍米沢藩の物流拠点となりました。物資を運ぶ人や牛馬、物資の商い、往来の宿、管理の陣屋等々が長井の町を次第に発展させ、江戸末期には酒田経由の最上川舟運は関税が高すぎると、朝日連峰を横断し村上までの「西山新道」を自前で開削するまで勢力を有し、「長井商人恐るべし」との言い伝えが残っています。この「西山新道」は現在も長井ダム周辺に残存し、往時完成を待たずに明治維新となったものの、この最上川舟運拠点としての200年の間に富と情報が蓄えられました。それは1855（安政2）年発行の「東講商人鑑」に記された街道沿いの豪商群にも見ることができます。



明治以降、長井はこの江戸時代に蓄えられた富と情報によって他の地域に先駆け、郡役所の創建、養蚕から織物産業の振興へ、つつじやあやめ園の開園、舟運から鉄道への移行もすばやく対応し、1914（大正3）年の国鉄長井線開業と同時の電気会社の設立、郡是工場、東京芝浦電気の誘致と時代に対応した発展を続けてきました。そして、それぞれの時代の象徴ともいえる建築物を構築し、その一端が現在も残存しているのです。

## 長井市の主な近代洋風建築

長井市が今に大切に保存している、近代洋風建築。その代表的な建物をご紹介します。

# 長井市の代表的な建築物 ～長井小学校～



## 長井市立長井小学校



1881(明治14)年、長井駅東に宮小出学校として創設、1914(大正3)年の長井線開業に合わせて1915(大正4)年駅前通りの突き当りに改築移転しました。その後1933(昭和8)年現在地に移転し、第1校舎創建。間口5間(9.1メートル)、奥行き50間の総2階建て、瓦葺き朱色のストレート外壁の校舎は往時「これが小学校の校舎か」と言わしめたものでした。南に面した50間の中ほどに間口4間、張り出し3間の玄関部を設けています。

1階が昇降口、2階が応接室。外観デザインは、柱を見せる真壁作り。柱がクリーム色で、ストレート外壁の朱色との対比が特徴的です。窓は1間2つ割りの欄間付き引違い窓となっています。1872(明治5)年の学制発布から全国に擬洋風の学舎が建てられはじめ、山形県では1876(明治9)年、鶴岡に朝暘学校がもっとも早く建てら

れていますが、上下窓です。明治の擬洋風学舎は上下窓の洋風が多く、それは明治政府の方針もあったようですが、日本の風土や使い勝手などで次第に引き違い窓になっていったと思われています。

玄関部は妻入りの切妻屋根で、頂部半分を小屋壁と共にわずかに迫出し、もち送り庇の下部に対の小窓を設けています。2階床の桁部分に庇を設け、1階教室への日射の遮断と水平線が強調された作りとなっています。

内部は洋館にもみられる重厚な階段、船底天井、縁甲板張りの廊下、木製の出入り口であり、すべて木材でつくられています。新築当時は木の香りが漂う学舎であったことでしょう。

黒光りする縁甲板張りの廊下は今年で77年目となり、これは受け継がれた児童の拭き掃除の成果です。国指定有形登録文化財となっています。





## 長井市の代表的な建築物 ～桑島記念館～

### 桑島記念館

1927(昭和2)年、初代桑島五郎院長が当時洋行費用16,000円あまりを建設費に投入して創建されました。間口7間、奥行き4.5間、総2階建てで、正面2階に鉄製バルコニー、玄関部に化粧持ち送りの庇がついています。ゴシック建築名残の棟飾りや屋根のドーマー窓、石造りに似せた洗い出しの外壁などが特徴です。当時の新聞には、「鉄鋼コンクリート」と紹介されていますが、実際は木造の骨組み。ただし、外の洗い出し壁は5センチもあり、その下地は、らせん状の鉄網へ砂利を入れたモルタルで固めた強固なもので、「鉄鋼コンクリート」と表現されたとおりです。



2代目桑島誠院長が働き盛りで急逝の後、商店街の倉庫として利用されていましたが、1995(平成7)年3代目桑島一郎院長が新医院建設のため、やむなく取り壊しを決定しました。しかし、「旧桑島眼科医院保存の会」が中心となって120メートル先の商店街組合の事務所跡に移転保全し、現在中心市街地活性化の拠点となっています。

約半年の間に行われた曳き移転でしたが、日本各地には建物を移動する「曳き師(ひきし)」の技術があり、戦前までは道路をまたいでの建物移動は当たり前の光景でした。この“建物を曳く”ことによって不要になった人が建物を譲る、という今でいうリユース、“建物のブックオフ”です。戦後自動車社会になり簡単に道路を遮断しての曳き移転は難しく、また戦後の高度経済成長時代は、スクラップアンドビルドが主流となり、曳き師そのものが不要になりました。ただし、長井地域にはまだその伝統があり、さらに曳き師の技術もコンピュータ利用の現代的なものとなり、120メートルの曳き移転が実現しました。また、費用も商店街だけでなく、市民より広く募金、さらには「日本財団」による補助も受け1995(平成7)年の年末には、外装も改修、曳き移転完成セレモニーが行われました。

長井市指定文化財。



## 長井市の代表的な建築物 ～小桜館～

### 小桜館（旧西置賜郡役所）

旧西置賜郡役所は、1878（明治11）年7月の郡区町村編成法発布により、8月着工、11月竣工、12月1日開所、創建の建物です。擬洋風の郡役所で現存するものでは全国唯一です。1カ月遅れで建てられた物では、寒河江にある旧西村山郡役所があります。

郡役所制度が廃止される1925（大正14）年まで使用され、それ以後も県や国の出先機関事務所として利用され、増改築が繰り返されてきましたが、1990（平成2）年から2002（平成14）年まで倉庫、途中取り壊しも想定されましたが、文化財保護団体を中心とした市民運動で保全されました。平成15年度山形県歴史的建造物活用事業で平成の改修工事が行われ、それまでの倉庫から、会議や展示ができる施設となりました。時代的にも地域の歴史文化が見直される風潮となり、ゆったりとした駐車場、中心市街地の立地、明治の洋館の雰囲気などもあり、2005（平成15）年より「小桜館」の愛称となり、幅広く市民に活用されるようになりました。さらに2010（平成22）年には創建時復元の改修工事が行われました。

間口15間、奥行き4.5間の当時の郡役所建築の定型ともいえる造りであり、中央玄関部のみ間口5間の総2階建てです。玄関は間口2間、奥行き1間のポーチとなっており、庇上部に木製のバルコニーがついています。屋根は創建時瓦でしたが、1908（明治41）年の写真では木羽葺き、戦後はトタン葺き、2010（平成22）年の改修工事では耐久性の高い鋼板横葺きとなりました。

長井市指定文化財。



### 小桜館 ～建物と歴史をつなぐエピソード～

ここからは、実際に二宮さんに現地「小桜館」を案内していただきながら、建物と歴史についてお聞きしました。

【質問1】山形県の郡役所が全国から見て早く建てられたのはなぜですか？

「文明開化」「明治維新」という、新しい時代になったということを明治政府は国民に知らしめなければなりませんでした。そのために明治政府は、なかなか東北地方が江戸時代から抜け出せないということから、山形県令として鹿児島出身の三島通庸が着任しました。そして山形県には11の郡役所が建てられ、その第1号が長井の西置賜郡役所だったのです。郡役所を「西洋館」で建てたのは「時代は明治だ！！」という政府の動きからです。長井がいち早く郡役所建設に踏み切ったのは、最上川舟運の拠点となっていたことにより富と日本の中心からの

情報を有することができたからだったのです。

【質問2】当時の「西洋館」の特徴が小桜館なのですか？

1878（明治11）年、まさに明治維新から10年ほどで東北の長井まで洋館が建てられるようになったと考えたいのですが、実際はペリー来航が1853（嘉永6）年。1859（安政6）年の横浜開港以降洋館が建ち始め、最も古い1864（元治元）年の写真にはおびただしい数の洋館が写っています。

つまり、長井の小桜館は横浜に西洋館が建てられてから約20年も経過の後の建物だと言えます。だから、西洋館の特徴といわれる要素は、ほとんど小桜館にみられるのです。

軒下に壁から直角に出ている「ディンティル（歯飾り）」、木の板を横方向に重ねた「下見板張り」。さらにその板の上に白っぽいペンキを塗り、窓は上げ下げ窓、基礎は石積みの連続基礎、ポーチのついた玄関と、2階の窓から出入りするバルコニーなど、これらはすべて「西洋館」の特徴です。

【質問3】玄関廻りは西洋館というより日本の神社のように見えますが…？

西洋館のデザインは建築家がマニュアルをつくったりしていますが、日本の建築家が誕生するのは、明治12年以降なのです。つまり小桜館は、日本人の建築家がデザインしたものではなく、おそらく西洋雛型といった建築指南書を参考にしながら地元の宮大工が造ったもので、玄関の出入り口の上にかかっている横の部材を虹梁（こうりょう）、柱から伸びている部材を木鼻（きばな）と呼びますが、このデザインは江戸後期の神社の向拝部分に近いものです。

【質問4】現在は西側の新設された玄関から出入りしていますが、郡役所としての建物だったときはこのポーチのある玄関から出入りしていたのですか？

実際、この玄関から出入りしていたのは、当時の議員、役員のような身分の高い人たちです。小桜館を正面から見るとわかるように左側にもう一つ、入り口のようなものがあります。

当時、様々な届出をしにやってくる人々はそちらから出入りしていたものと思われます。現在の1階フロアは改築され、間取りもやや変わっていますが、当時はそういった人たちのための窓口もあったのではないかと想定されます。

【質問5】建物の内部を見るときは、どんなところに、近代洋風建築の特徴がみられますか？


特にこれというのは難しいが、室内天井が高いのは、そのころの公共物建築の大きな特徴の一つだと思います。あとは、1階ホールの床、フローリングの張り方は、非常に特徴的で、おしゃれにできています。

これは、私たちが改修工事を手掛けるようになってから張り替えたものなのですが、元々、このような、斜めにはられていたのをそのままの形で改修したのです。なかなかいいでしょう？

まるで広葉樹の葉脈のようになっているんです。

ここは、偶然にも写真がないので、気になった方は、直接小桜館に足を運んでみて下さいね！

---



○掲載日 平成 23 年 9 月

○執筆者 二宮正一（日本建築家協会会員、一級建築士、地域プランナー）

○写真提供

○取材協力

○関連ページ